「そめちがへ」と「かくれんぼ」：明治三十年の鴎外

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1984-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1599

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「そめちがへ」と「かくれんぼ」

―明治三十年の鷗外―

須田喜代次

一

明治三十年六月、博文館は、その創業十周年を記念して、雑誌『太陽』の臨時増刊号を刊行している。この本文だけでも六百九十頁余にも及ぶ大冊の一巻には、「皆之れ他日明治の小説歴史に於て重要なる位地を占むべきもの」（大橋新太郎「博文館創業十週年紀念臨時増刊の辞」）として「当代文壇の大家七氏の名作」（明30・6・7付『読売新聞』掲載広告）が一挙に再録掲載されたわけなのだが、[注1]この「当代文壇の大家七氏」の一人に鷗外もその名をつらねている。そして同誌に彼の作品として採られたのは、明治二十三年四月から二十五年四月まで断続的に十回に渡って『柵草紙』に連載され、のち『水沫集』（明25・7、春陽堂）にも収録された翻訳作品「埋木」であった。

この芸術と悲恋をテーマとする小説に関しては、同誌に唯一書きおろしで発表された「明治の小説」なる一文において、樗牛高山林次郎も「舞姫、空象の記、埋木等は、紅葉、露伴の外に独得の風趣を保ちて、永く後代の珍となすに足る」（傍点原文、以下特に断らない限り同様）としていた作品であり、その意味でも、特に当代の人々にとっては、藤村がいちはやく嗅き取った「明治二十年代の早い春」[注2]の香りを多分にたたえた作品であったと言っていい。

もっとも当代文壇の大家の一人に数えられたとはいっても、周知のように、この時期小説家としての鷗外は、明治二十四年一月「文づかひ」を発表して以来六年間沈黙の人となっていたのだった。のみならず、批評活動においてもまた、ドイツからの帰国後数年間のようなはなばなしい活動は影をひそめていた。

そんな鷗外漁史に対しては、二ヵ月後の明治三十年八月二十日発行『太陽』第三巻第十七号誌上において、こう述べられている。

「雲中語に隠れて古作家の古作を云々するが如きは、吾等鷗外の為めに甚だ取らず。鷗外果して捲土重来の意気なきか。」

そして実は右『太陽』誌に「捲土重来」を促されるのと相前後する、同月五日発行の『新小説』第二年第九巻誌上に、鷗外は六年ぶりの小説を公にすることになる。それが、鷗外小説作品史上、前後十五年以上にも及ぶ空白期間(注3)のただ中に、ポツンと発表された作品「そめちがへ」である。

二

「そめちがへ」発表に先立つ半年前、明治三十年二月の『太陽』誌上に掲載された「今の文学界」と題する記事の中で、鷗外は記者の質問に答えてこう述べている。

「僕は余り雑誌などへは書かないで本を拵らへやうと思ふ、僕が少しでも書くと彼是批評して五月蠅い、フン成程、それは批評家などは眼中に置かんでも善からうが、あまり彼是と言はれたくも無いのさ、」

「余り雑誌などへは書かない」つもりだった鷗外が、いつ「そめちがへ」の構想を得、執筆に着手したのか、あるいはいつ脱稿したのかといった本作品の舞台裏ともいうべきものは、これを徴すべき資料がない。ただ発表前月の、明治三十

年七月五日発行『新小説』第二年第八巻巻末に掲載された次号予告には、「左の諸文豪に請ふて執筆認諾の栄を得たり」とあり、その〝諸文豪〟の中にすでに鷗外の名が見えておるので、具体的な作品構想はともかくとしても、執筆の約束はすでにこの時点でできていたことがわかる。

彼にともかくも六年ぶりに小説の筆を執らせることになったについては、当時の『新小説』の編集責任者であり、「三人冗語」・「雲中語」を通じての仲間であった幸田露伴の力に負うところが、やはり一番大きかったのではあるまいか。(注4) なお、同年七月二十六日発行の『めさまし草』巻之十九には「鷗外漁史作　そめちがへ　近刊新小説所載　春陽堂」という〈特別広告〉が載っており、「そめちがへ」の完成を知ることができる。

ところで、このようにして発表された六年ぶりの鷗外作品は、彼の「あまり彼是と言はれたくも無いのさ」という気持ちとは裏腹に、発表当初かなり「彼是批評」されている。しかもその寄せられる批評は一様に冷たいと言っていい。たとえば、『帝国文学』（明30・9）は、

「鷗外の染違へは、この人の隠し芸として、愛嬌あれど、西鶴の範囲外に出でずとは、まだしも、縁雨を学んで、その剪裁の筆、遙に下れるもの乎。」

として一蹴するとともに、本作品における西鶴・縁雨の影響をいちはやく指摘(注5)し、以後の作品評価の基本線とも言うべきものを打ち出しているし、『反省雑誌』（明30・10）はまた

「『新小説』中鷗外の『そめちがへ』はおれでも斯んな事は書けるよと一寸多芸の工合を示したるものなるべし、されど『埋木』流にあらねば作者の柄に合はぬなり、西鶴流は世に余る程あり、余計な方面に手を出して其派の通とやらむ言はるゝ人々に笑はれぬこそよかるべけれ、」

とし、二ヵ月前に『太陽』誌上を飾った「埋木」流にあらざる「そめちがへ」を否定的に評価する。この『反省雑誌』の論調の延長線上には、「観風的眼光の燃犀を認むと云ふ者あれど、吾等は其品卑くして情いやしきを見る。文字は流石

に苦心の跡見えて簡勁嘉すべしと雖も、吾等は『埋れ木』、『舞姫』の高韻を擇ぶ」という『太陽』（明30・9・5）の批判が存在する。

さらにはまた、

「殊に鷗外の『そめちがひ』に至りては全篇軽浮淫猥一読唾して捨てむと欲す。（略）今後益々醜陋文字の文壇に跋扈することあらば、吾人は断じて鷗外の罪に帰せむ。渠亦老ひたるかな」。

という痛罵に近い批評も、これを『よしあし草』（明30・9）誌中に見ることができる。そもそも「雲中語」においてすらそれは、「然此種之文、究竟非鷗外当行本色」と評されているのだ。

「明治二十年代の早い春」を感じさせた作品群とは、一転、趣を変えた鷗外初めての試み（藤村言うところの「ある一転機」[注6]）を人々は支持しなかった。それは、とどのつまり「鷗外漁史がそめちがへは鷗外漁史がそめちがへなり得意の作にあらざるべし」（「鷗外氏の新作」『文芸倶楽部』明30・9）という有名な斎藤緑雨の発言に収斂される評価しかえられなかった作品であり、そうした作品評価は、発表当初のみならず「内容も文体も硯友社の亜流に近い」（吉田精一「『筑摩全集類聚森鷗外全集1』〈筑摩書房〉解説」）、「紅葉などの後塵を拝したものにすぎず…」（山室静『評伝　森鷗外』〈実業之日本社〉）、「内実は硯友社以前、たとえば斎藤緑雨の亜流と呼ぶほうがもっと正確」（三好行雄「反時代の小説―『そめちがへ』『鷗外と漱石　明治のエートス』〈力富書房〉所収）という近年の評価にまで一貫していると言ってよいだろう。

鷗外作品群の中でも、もっとも軽視、あるいはもっと言えば無視されることの多かった作品の一つである「そめちがへ」一篇は、やはりそうされるだけの実質しか持ちえていないということになるのだろう。

が、明治三十年、久々に筆を執った鷗外は、ではこのいわば〝失敗作〟において一体何を試みたのか。彼が、西鶴まがいの、緑雨の亜流のような作品を、この時期に書く必然性は何だったのか。

確かに彼はこの時期、先に見たように「雑誌などへは書かない」ということを言ってはいる。が、同時に、「本を拵ら

へやうと思ふ」とも言っているわけであり、沈黙しているとはいえ文学に対する意欲・関心までを失っているというわけでは毛頭ない。事実、彼は友人（文学上の友人であろう）が多く作っている材料帳にならって[注7]『小紺珠』なる材料帳を作り、この時期使用している。創作活動への意欲があってこそ、この材料帳は意味を持つはずだ。

とすれば、おそらくは露伴の慫慂に従って、すなわち外発的な働きかけがあって初めて書き上げられた作品ではあったにしても、そして、たとえそれが結果的に失敗作品であったにしても、本作品にはこの時期の鷗外の文学への姿勢、あるいは当代文壇への関わりが見て取れるのではないだろうか。

以下「目不酔草時代」（森潤三郎）唯一の小説作品「そめちがへ」の世界をわたくしなりに見直し、明治三十年代初頭、いわゆる小倉時代直前の鷗外の一側面について考えてみたい。

三

森潤三郎著『鷗外森林太郎』〈森北書店〉に、日付不詳ながら「そめちがへ」に関しての、鷗外宛賀古鶴所書簡が写真入りで掲載されている。[注8]長い書簡の末尾の一節のようだが、その中で賀古は言う。

「染ちがひ一枚ふとんに枕二つのあたり実景其まゝにてどうしても待ち合ひ遊びを知らぬ人の筆になりたりとは思はれぬといふもの多し、きむすめは些と読みかねる所があるといふ。小生には例のモタ〳〵した舌たるひ話を誠にあっさりと気持ち好く読下したるやうに覚え候」

賀古は「どうしても待ち合ひ遊びを知らぬ人の筆になりたりとは思はれぬ云々」と述べているが、鷗外作品中唯一の花柳界を舞台にしたこの小説に関しては、鷗外の直属の部下であった飯島茂もまた「殆んど芸者遊びに経験の無かった鷗外が、よくもあれほど描いたものだと感心していた」という（河村敬吉「鷗外の性生活とその意見」『若き鷗外の悩み』〈現代社〉

所収)。

が、どうやらこの小説のエピソードには、そのもととなった実話があったらしい。それはすでに発表直後に緑雨が「聞くこは実話なりと」(前掲文)と指摘していたことなのだが、右の賀古書簡でも「例のモタ〳〵した舌たるひ話云々」とあり、その〝話〟を賀古も知っていたことをうかがわしめる。もちろん今、その原「そめちがへ」とでも呼ぶべき〝話〟の存在・内容は確かめようもないのだが、作品発想の原点にそうした実話があったということは一応確認しておいてよいだろう。

が、それだけで作品が成立するわけではもちろんなく、そしてそのこと以上に重要だと思われるのは、緑雨が、やはり前掲文中において「西鶴より出づと白蓮庵氏言へりさらば初歩のみわが知れる西鶴は此の如きものにあらず」としている点だ。

後半部の緑雨の批判は今は措く。白蓮庵、すなわち森田思軒が「西鶴より出づ」と言っている点に注目しておきたい。なぜならば彼は「そめちがへ」発表に先立つ二ヵ月程前の明治三十年六月十二日、観潮楼において行われた「好色一代女」合評会の参加メンバーの一人であるからだ。この席上、鷗外が、当時刊行されるたびに発禁処分という憂目を見ていた西鶴(注9)を、イタリアのボッカチオに比しいちはやく高く評価していることは広く知られている通りだが、そのほかにも彼は「一代女」の各巻各章ごとに、三木竹二の梗概に引き続いて寸評を加えており、その勉強ぶりをうかがわしめる。そして、実はこの合評会の模様をまとめた「標新領異録」・「好色一代女」編がその巻頭を飾った『めさまし草』(明30・7・26刊)巻末にこそ、先に紹介した「そめちがへ」の〈特別広告〉は掲載されているのである。

すでに述べたように、作品「そめちがへ」の執筆月日を確定することはできない。が、『新小説』誌の依頼を受けてからであることは間違いあるまいから、早くて六月の末、おそらくは七月上〜中旬の執筆といったところではないだろうか。すなわち鷗外は、「好色一代女」を合評会で勉強してから程遠からぬ時期、その模様を「標新領異録」にまとめあげ

る作業と相前後して「そめちがへ」執筆に取りかかっているということになるはずなのだ。「西鶴より出づ」という白蓮庵の発言は、あるいはそうした事情を知っての上のことだったのかも知れない。

そもそも「好色一代女」ならぬ「そめちがへ」の主人公である芸者兼吉は、好色な女と呼んでもよいような人物として設定されている。彼女は小花に宛てた手紙の中で、自ら「御存じの通の私が身持、昨日は誰今日は誰と浮名の立つを何とも思はず」と述べ、あるいは「可笑な事申す様ではあれど色々の男と寝たことある私」と言い、さらには「今迄も不身持な女子のこの末はどうなり申すべきか、我身で我身が分り申さず」と書いてもいる。まさに「好色一代女」中の一エピソードを担うことのできそうな女性と言えようが、作者は事件が落着した作品の末尾においてもなお、「兼吉はまたけふが日迄、河岸を変へての浮気勤、寝て見ぬ男は誰様の外なしと、書かば大不敬にも坐せらるべきこと云ひて」と相変わらずの好色女ぶりを書き留めている。こうした人物設定が、「全篇軽浮淫猥」という批判を生むことにもなるのだろうが、実はこの作品の主眼は、こうしたいわば〝好色女〟たるべき兼吉が「(清二郎ヲ)罪に堕すことの出来ぬ様な何とも知れぬ心」になった点を記すことにこそある。

話はこうである。

馴染の客を朋輩の芸者お徳に奪われた兼吉がふさぎこんでいるのを見て、代地の待合・朝倉に来合わせた客の三谷が憂晴らしに誰か気に入りの男を呼べとけしかける。そこで兼吉は、友達の芸者小花の馴染客、かねて秘かに思いを寄せていた競呉服店中屋の次男、清二郎を呼ぶことになる。やがてやって来た清二郎と兼吉は別室に。清二郎のラムネの注文を、扱ばかりになった兼吉が階下に言いやるところを見たお万の話から、このことを知ってふさぎこむ小花。その彼女のもとに兼吉からの長い文が届き、一際の顚末が明らかになる。

「さて女の性は悪しきものと我ながら驚き候は、大人しく横になつて居た清さんの領へ私が手を遣りし事に候、其時

に清さんは身を縮めてぶる〳〵と震ひなされ候、女の肌知らぬ人といふではなし、可笑な事申す様ではあれど色々の男と寝たことある私、つひにない事、はつと思つて手を引き候とたん何とも申さう様のない心持致し、それ迄燃え立つ様に覚え候胸の直様水を浴せられ候ふ様になり、ふつゝりと思ひ切つて…」

これが「何とも知れぬ心」の実体だ。浮気な芸妓兼吉の心に宿る清廉さを鷗外は書き留める。

西鶴「一代女」は、その長い性の閲歴の物語を語り終えるにあたって「たとへ流れを立てればとて、心は濁りぬべきや」ということばで一篇をしめくくっていたわけだが、今そのことばにならえば、その濁らぬ心の所在をこそ兼吉は示したとも言えようか。

そしてこの「いかにも鷗外らしい倫理的収束といえばいえそう」(三好氏、前掲論文)な結末は、(またしても結果的に同時代評の確認になってしまうのだが)本作品執筆の上で鷗外がもっとも意識したと思われる斎藤緑雨、それも具体的に言えば作品「かくれんぼ」に対するものとして導き出された結末なのではないだろうか。やや先走った言い方をすれば、鷗外をして久々の小説に筆を染めさせた外的な要因を先の『新小説』誌・露伴の慫慂とすれば、その内的要因は、このもう一人の「三人冗語」の仲間、緑雨だったのではあるまいか。

四

明治二十四年七月、春陽堂版新作小説叢刊『文学世界』第六号に発表された短篇小説「かくれんぼ」は、緑雨花柳小説の代表作として、つとに名高い作品である。岡野他家夫氏は、本作品を「いわば明治の色道残酷物語」(注10)とまとめているが、ふところ育ちの「ぼッちやん」・山村俊雄という一青年が、ふと仲間に誘われて芸者遊びを覚えて以後、次から次へといろいろな芸者と関係して行くという物語だ。

ところでこの明治二十四年発表の作品が、丸六年後の明治三十年六月、文壇内外に一つの物議を醸し出すことになる。と言っても、作品そのものが、というよりも、作品に対する作者緑雨の談話がひき起こしたのだけれども。

きっかけは明治三十年五月三日発行の『新著月刊』第二号に掲載された「作家苦心談」中の、「斎藤緑雨氏が『かくれんぼ』の由来及び色道論、恋愛論等」(注11)にある。これは、表題からもうかがえる通り、緑雨の、自作「かくれんぼ」に対する談話を後藤宙外が聞き役として筆記したものなのだが、これがために『新著月刊』編集人でもあった宙外は「警視庁に召換され」るという事態にまでなってしまったようだ。(注12) 問題となったのは、その「色道論・恋愛論等」の部分である。

たとえば緑雨は言う。

「道徳は誰れにだッてある。唯道徳の綱の下にかゞんで平伏してゐるのはつまらない、道徳の上にあぐらをかく気でなくてはいけない、其れを不道徳だといふ奴はまだ道徳の本義を知らないのだ。」

あるいは言う。

「自分の考へでは、恋の性質から云ッて、夫婦なんて云ふものを拵へるの必要がないと思ふ。須く都会毎に一大倶楽部を起こして、貴賤老若あらゆる男女を随意に這入らして、勝手放題にすいた奴と会ふことにしたらよからう。若し子が出来たら、倶楽部の入場料で養育するがよい。決して是れで富国強兵に害はない。徹頭徹尾恋愛は神聖だなぞと云ふことは嘘だ。体のいゝことを云ふのは虚偽だ。夫婦なんかはいらない。」

さらには「すいた同志は一所にねろと云ふのだ」とか「人間の一生は色だ、色に限る、誰れでも色で一生が送られゝば送るに違ひない」などという言辞に接するに及んで、当代文壇は、いっせいに緑雨発言に対する反駁を、翌六月の諸雑誌に展開することになる。

「彼が説くところは、全然道徳を破壊するにあり。色慾を以て人生の目的とするにあり、共婚主義を主張するにあり。一切の倫常を挙げて獣慾の犠牲とするにあり。而して之を行るに卑猥言ふに忍びざるの文字を以てし、到るところ嫖

「そめちがへ」と「かくれんぼ」

客娼婦の情事を穿鑿して、却て得々たるものの如し。あはれ人は如何にせば、其徳性の堕落、心情の卑劣、果して能く是の如きを得べきか。」

というのは『太陽』（明30・6・5）時評欄中の文言だ。『帝国文学』（明30・6）記者もまた

「緑雨の論の如き是れ寧ろ人間を侮辱せるものにして、余輩悒然言の加ふべきを知らず。彼は到底道徳の何たるを解せず、発達進化の理を知らず、又人間美の如何を覚りたるものにあらず。」

として緑雨論を切り棄てる。他雑誌の論調も、大むね右二誌の延長線上にあると言っていい。

これらの緑雨発言をめぐってのさまざまな反響は、当然鷗外の目にも触れていたことであろう。「其筆に長所のあるのを愛して友としていた」（小金井喜美子「次ぎの兄」『森鷗外の系族』〈大岡山書店〉所収）緑雨が批判の矢面に立たされている問題に、彼が無関心であったとは思えない。そしてまさにこの時、鷗外は『新小説』誌からの執筆依頼を受けることになる。その時、六年ぶりに小説の筆を執らんとする彼は、こうした情況に対して、作品という形を通しての、彼なりの敏感な反応を示したのではないだろうか。

それほどに、「そめちがへ」の世界は、緑雨「かくれんぼ」の世界の設定に基づいて成立しているように思えるのだ。前述したように、今物議を醸し出しているのは緑雨文のうちの「色道論」、あるいは「恋愛論」といった部分であり、どうしてもそこに目が行きがちだが、そもそも緑雨談話は、いわば「かくれんぼ」の楽屋話を語ることにその主眼があった。だから本来先の緑雨の発言も、「かくれんぼ」との関連の上で問題にされねばならないはずであり、それだけを切り離してクローズアップしては、緑雨の真意を曲解することにもなりかねまい。

ところで、この談話の中で、たとえば作品題名である「かくれんぼ」について、緑雨はそれが上方唄の「朝顔のさかりはにくし迎ひ駕籠、よるは松虫、ちん〳〵〳〵、ちろり〳〵、見えつかくれつかくれんぼ」に由来するものであることを明らかにしている。まず、こうした作品題名の由来からして、鷗外は緑雨から学び取ったのではあるまいか。

「そめちがへ」という題名が作品末尾「雨の日を二度の迎に唯だ往き返り那加屋好の濡浴衣慥か模様は染違」という荻江節の一節から来ていることは問違いないところだが、そうした題名の由来のみならず、それを他ならぬ荻江節としたことにも先の緑雨談話を鷗外が読んだ上での設定と思わせるふしがある。

というのは、これも二作品に共通のこととして作品舞台がともに柳橋であるということがあげられるのだが、そのことに関連して、緑雨は自作の欠点として「河東の『かし小袖』をさらふ云々とあるのは不都合だ、吉原ならば知らぬこと、柳橋あたりでは余り歌へる者がないと云ふこツてす」としたあとで、続けて「荻江のものを挙げりやアよかツた」（傍点須田）と言っているのである。その荻江節を鷗外は自作に使うことになる。

さらに細かなことではあるが、緑雨談話は「かくれんぼ」に登場する芸者には皆実在のモデルがあり、そのうち主人公山村俊雄が最初に関係する芸者小春は現実には「小花」という女であり、「雪江とあるは小万と云ツた芸者で」あることを告げている。また作中で、いったんは俊雄と別れながら最後に「再び焼付いた腐れ縁」となるのは「……通町辺の若旦那に真似のならぬ寛濶と極随俊雄へ打込んだ」「歳二ツ上の冬吉」（傍点須田）ということになっている。

こうした緑雨談話や作品の設定は鷗外作品の中で、清二郎馴染の芸者「小花」とか、三谷馴染の「お万」とか、「お前様といふものある清さんに年上なる身をも恥ぢず思を掛け」る、清二郎より一つ二つ歳上の兼吉、という設定の中に生かされるのではあるまいか。

つまり、緑雨は自らの作品完成後、それが西鶴の「一代女」や「一代男」に類似しているのを見て、「ぎよつとした事があつた」としながらも「勿論『かくれんぼ』には本から取つて来て、鬘だけを取かへたやうな女は居ない」ときっぱり言い切っているのだが、こと鷗外の事情に即して言えば、鷗外「そめちがへ」に登場する人物たちは、清二郎をも含めて、多分に緑雨作中人物の「鬘だけを取かへた」ような面がありそうなのだ。

そして、だとすれば鷗外は、緑雨の言う次の「かくれんぼ」執筆モチーフについても、当然注意を払うところがあった

「そめちがへ」と「かくれんぼ」

に違いない。

「あれを書く気に自分をさせたのは、魯文以来、千篇一律になッた芸娼妓ものが、猥褻だと云ふんで排斥されてゐましたネ、此の風潮に対してヤケにさかさまに出かけて見やうと思ッたので、芸娼妓だッて恋も知ッてゐるし、人間らしい所もあると云ふのを見せてやらう、と云ッたやうなつもりで、『かくれんぼ』の如き途方もないものを書いたが、……」

「かくれんぼ」に果たしてどれだけ「芸娼妓だッて恋も知ッてゐるし、人間らしい所もある」ということが表現しえているかは改めて検討せねばならない。が、まさに「そめちがへ」の鷗外は、そのことを、先に見た兼吉の行動・心情の中に示しているとは言えまいか。

そして、芸娼妓もの即猥褻、という魯文以来の狭い、固まった既成概念を崩そうとする姿勢において、鷗外・緑雨はこの時共通の地盤に立っていたと言ってよいであろう。

五

「そめちがへ」が、登場人物や舞台設定等の面において「かくれんぼ」のそれに類似するとはいっても、二つの作品世界の内実は、もちろん全く正反対と言っていいほど対照的なものとなっている。否、鷗外は意識的に、批判の渦中にある緑雨作品と同様の設定の中から別種の世界を描き出すことをこそ目ざしたのではなかったか。その意味では確かに「緑雨の亜流」には違いない。もっとも結果的には、彼の作品もまた「軽浮淫猥」との評を受けてはしまったけれども。この二作品の違いを、二人の作家としての資質の違いに帰すことは簡単だが、それ以上に作品執筆時の緑雨発言をめぐる一連の動きに対する、鷗外の意図的な反応を見るべきではあるまいか。

たとえば、同じく初心な青年として作品には登場しながら、山村俊雄が次々と新しい芸者と関わりを持って行くのに対して、中屋の清二郎は、「かくれんぼ」の冬吉にあたるべき兼吉の誘惑を退け、「何遍言うてもあの女でない女房は生涯持ちませぬ」と頑固にその純情さを貫き通し、めでたく小花と結ばれることになる。これも「恋の有難くない証拠は、初恋のやつが添ツた例が、今まで一つもない、(略)夫婦だなんて威張ツたツてつまらない。真の愛から出来たのぢやない」とした緑雨発言に対するかのように、「初恋のやつが添ツた例」として「真の愛」から晴れて夫婦になる二人を描いている。その愛は、手練手管にたけた兼吉さえも、「罪に堕すことのできぬ様な何とも知れぬ心」にさせるだけの力を持っているというわけだ。

こうした創作活動のあり方自体は、後に彼自身が使うことばに従えば、まさに「あそび」ということになるのだろう。そして、そうした彼の姿勢と、先に見た作品評価の低さとは無関係ではありえまい。

が、はからずも本作品には、明治三十年、雌伏する文学者鷗外の当代文壇に対する十分な関心を示していることにならないだろうか。そしてあえて「今の文壇の創建に先だつて、生埋の運命に迫られた」(「鷗外漁史とは誰ぞ」) 一人である緑雨に拠ったところに、やがて当代文壇を「末流時代の文壇」と規定することになる鷗外を見てとることができるように思うのである。

注1　収録作家とその作品名を目次によって示すと次のようになる。明治三十年という時点における一つの〝評価軸〟を見ることもできよう。

「当世書生気質」　坪内　逍遙
当世商人気質　饗庭　篁村
浮　雲　長谷川四迷
浮城物語　矢野　龍溪

「そめちがへ」と「かくれんぼ」

大詩人　幸田露伴
埋木　森鷗外
二人女房　尾崎紅葉
明治の小説　高山林次郎」

注2　「『水沫集』一巻は、青春の書と言ふにはあまり老成なやうな気もするが、明治二十年代の早い春はあの集のどの頁にも残つてゐる。」（島崎藤村「『千曲川のスケッチ』奥書」『定本版藤村文庫　第三篇　早春』所収）

注3　創作小説作品としては、明治二十四年一月発表の「文づかひ」のあと、間に「そめちがへ」をはさんで「朝寝」が発表されるのは、明治三十九年十一月のことである。

注4　小堀桂一郎氏も次のように指摘している。
「この当時の『新小説』は盟友幸田露伴の編輯であつた。（略）『そめちがへ』の執筆も、これは応援ではないが、露伴の文業と位置とに触発されて――、といふのがまた一面の動機であつたらうと思はれる。」（『森鷗外―文業解題　創作篇』〈岩波書店〉）

注5　『文学界』（明30・9）には「文の趣といひ、作の性質といひ、何やら平生友とせらるゝ緑雨、露伴のものに似たる節あり」という指摘がなされている。

注6　「その後に、鷗外漁史はめづらしく創作の筆を執つて、『そめちがへ』一篇を『新小説』誌上に発表した。私はそれを読んで漁史のやうな人にもある一転機の来たことを感じた。」（注2に同じ）

注7　「小紺珠」冒頭に鷗外はこう書き記している。
「友人多く材料張を作る。われも亦顰に倣うて、小紺珠を編す。あはれ、かやうなる煩き事、能くいつまで続くべきか。覚束なき限なりかし。」

注8　『鷗外』誌第二号に掲載された一〇二通の鷗外宛賀古書簡には見当らない。

注9　「井原西鶴の好色ものと為永春水の『梅暦』とは、刊行されるたびに発禁となり……」（「発売禁止主要書目解題」『日本近代文学大事典・第六巻』〈講談社〉所収）
「この『西鶴全集』（筆者注、明27・5・6刊、『帝国文庫』23編・24編）は、当局を考慮して風紀上害があるとおもわれるところは伏字にして出版したのであったが発売後まもない明治二十七年七月五日に発売禁止の処分をうけた。やむなく内容をさらに削除し、『西鶴名著集』二冊として出版したが、これもまた発禁となった。」（「研究史通観」、暉峻康隆・野間光辰編『国語国文学研究史大成11　西鶴』〈三省堂〉所収）

注10　『日本近代文学大事典・第二巻』〈講談社〉

注11　これは後に『唾玉集』（後藤宙外・伊原青々園編、明39・9、春陽堂）に収録された。

注12　「○斎藤緑雨　氏が新著月刊の恋愛論のため、後藤宙外氏ハ警視庁に召換されたりと云ふ」（『読売新聞』明30・5・24）